

ブレーメン経済工科大学 交換留学報告書

静岡県立大学国際関係学部

国際言語文化学科 4年ヨーロッパコース

以前にも海外旅行で何度か外国を訪ねたことはあったが、ヨーロッパ圏を訪れたことは無かったので、今回の留学中に触れ合うことができた人々や言語、街並み、食事など、すべてが非常に新鮮なものに感じられた。約5か月間に及ぶ留學生活では、旅行などの滞在ではなく、短期間ながらも海外で生活したからこそ経験できたことが多くあるように思う。

まずドイツに着いて驚いたことは、様々な人種や国籍を持つ人たちが集まっていることである。私は毎日 ترامに乗って大学に通っていたが、車内ではドイツ語以外の言語が飛び交う場面に頻繁に出会った。また、大学でできた友達も「ドイツ人とトルコ人のハーフ」という人や「ドイツに住んでいるけどポーランド人」「両親がイギリス人とオーストラリア人」という人など本当に様々な背景を持つ人たちだった。そのような背景があるからか、ドイツにおいて、意見は「言葉にして伝えるべきもの」であると感じた。特に、そのことを痛感したのが授業中である。先生は単純な質問から、深い質問まであらゆる問いかけを私たちに投げかけた。その問いについて自分の考えを英語でまとめて分かりやすく述べるということに関して私はとても苦労したが、そのような意見をしばしば交換し合う根底には「自分と他人の意見が異なるのは当たり前」という意識が見え隠れするように感じた。また、私は英語が得意ではないため、ドイツに来た当初は大家さんとの会話は必要最低限になってしまっていた。そんなある日、大家さんから「あなたの考えていることが分からない。伝える努力をしてほしい。」と言われて、私は自分の怠慢な態度に気づかされた。それ以降、私は生活していくうえでの問題から、その日あった些細な出来事まで様々なことを話すよう努力するようになったのだが、この一件もまた、言葉によるコミュニケーションが重視されているために生じたものだと感じている。

このように、困難な場面に直面することも少なくなかったが、いつも周囲の人たち

が私を助けてくれた。特に、ブレーメン経済工科大学で日本語を学んでいる同世代の学生たちの存在はとても大きかった。彼らは、在学中に留学とインターンシップのために日本に滞在しなければいけないため、かなり本格的に日本語を勉強している。私は彼らの中の数人とタンデム(互いの言語を教え合うシステム)を組んだ。タンデムでは、授業で習ったドイツ語を実践できるだけでなく、文法や単語の使い方を気軽に質問できたり、教科書には載っていないような若者言葉を教えてもらったりできる貴重な機会であった。おかげで私は、約5か月間という短い滞在期間にもかかわらず効率よくドイツ語を身につけることができたように思う。一方で、彼らの日本語についての質問に答えようとするとき、私は日本語教師養成課程の授業で習ったことを活かすことができたし、日本語を客観的な視点から見つめるという経験ができた。また、タンデムパートナーとは一緒にショッピングやバーベキュー、テレビゲームをしたり、彼らの実家に招待してもらったり、お互いの誕生日を祝ったりなど、タンデムの時間以外にも非常に濃密な時間を過ごすことができ、私の大切な思い出となっている。本当に親切な人たちに恵まれたことで、私は初めてのヨーロッパ圏での滞在、また初めての留学だったにもかかわらず、ホームシックにもならず、何不自由なく留學生活を送ることができた。私の留學生活を支えてくださったすべての方に感謝したい。

ドイツでこのような経験をしてきて帰国した今、交換留學制度を通してブレーメン経済工科大学に留學できて本当に良かったと感じている。約5か月間という短い時間ではあるが、実際にドイツという国の中で生活することで、ドイツで暮らす人々の生活を垣間見ることができたし、同世代の学生がどのような目標を持っているのか、何を勉強しているのか、何に関心を持っているのかなどを、彼らとの交流の中で直接知ることが出来た。また、そのようなことを知れば知るほど、自分が生まれ育った日本という国を客観的に見る事が出来たように思う。

今はまだ、自分の留学経験がどのように今後生きて来るのかははっきりとしたことは何とも言えないが、自分が直に触れてきたあらゆることが自分の糧になってくれているような気がする。例えば、これまでも授業などでドイツの移民問題については学んできたが、私にとってはどこか抽象的でぼんやりとしたものだった。しかし、実際にドイツで生活する様々人々を実際にこの目で見たことで、より具体的で現実的な問題として捉えることができるようになった。留学中に見聞きしたこと、それを通して感じたことは決して忘れずにいたいし、ドイツでできた友達との縁をこれからも大切にしていきたいと思う。また留学を通して痛感した自分の弱点である「語学」に力を入れて、さらに世界を広げていくのが今の目標である。